

フィリピン人外部講師によるオンライン・マンツーマン指導に関する期待と課題

坂本 美枝¹ 半田 純子² 宍戸 真³ 阪井 和男⁴ 新田目 夏実⁵

¹サイバー大学 IT 総合学部 〒105-0011 東京都港区芝公園 1-6-8 泉芝公園ビル 2 階

²青山学院大学社会連携機構室 ヒューマン・イノベーション研究センター 〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25 青山学院大学総合研究所ビル 3 階

³東京電機大学情報環境学部 〒270-1382 千葉県印西市武西学園台 2-1200

⁴明治大学法学部 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1 明治大学サービス創新研究所

⁵拓殖大学国際学部 〒193-0985 東京都八王子市館町 815-1

E-mail: ¹yoshie_sakamoto@cyber-u.ac.jp, ²junko.handa0506@gmail.com, ³shishido@mail.dendai.ac.jp,
⁴sakai@meiji.ac.jp, ⁵naratame@ner.takushoku-u.ac.jp

概要 英語コミュニケーション能力を育成するための試みのひとつとして、フィリピン人外部講師によるオンライン・マンツーマン指導を単位修得可能な正規科目に導入することについて、日本人大学教員に対するアンケート調査の結果を報告する。英語科目担当 9 名、非英語科目担当 9 名から回答を得た。導入については概ね賛成という回答が得られた。導入の具体的な方法については、英語担当教員は外部講師に演習のみ委託する形式が、非英語担当教員は日本人教員と外部教員との協働指導形式が、もっとも望ましいと回答する傾向が示された。さらに、導入に際してもっとも大きな懸念は、外部講師との調整、次いで授業設計であることがわかった。

キーワード：英語コミュニケーション能力、オンライン・マンツーマン指導、正規英語科目への導入

Professors' Opinions about Introducing Online One-to-one Lessons with Filipino Instructors into University English Courses

Yoshie SAKAMOTO¹ Junko HANDA² Makoto SHISHIDO³ and Kazuo SAKAI⁴
Natsumi ARATAME⁵

¹ Faculty of IT and Business, Cyber University 1-6-8 Shibakouen, Minato-ku, Tokyo 105-0011 Japan

² Human Innovation Research Center, Aoyama Gakuin University 4-4-25 Shibuya, Shibuya-ku, Tokyo 150-8366 Japan

³ Department of Information Environment, Tokyo Denki University 2-1200 Muzai Gakuendai, Inzai, Chiba 270-1382 Japan

⁴ School of Law, Meiji University 1-1 Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo 101-8301 Japan

⁵ Faculty of International Studies, Takushoku University 815-1 Tatemachi, Hachioji-shi, Tokyo 193-0985 Japan

E-mail: ¹yoshie_sakamoto@cyber-u.ac.jp, ²junko.handa0506@gmail.com, ³shishido@mail.dendai.ac.jp,
⁴sakai@meiji.ac.jp ⁵naratame@ner.takushoku-u.ac.jp

Abstract This paper deals with a survey conducted in 2015 to find out Japanese faculty members' opinions regarding introducing online one-to-one conversation practice with outside Filipino instructors into university English courses with credits, because such practice can be regarded as helpful to foster students' English communication abilities. 18 professors (nine of whom teach English courses at universities) answered the survey, and most of them showed their willingness to introduce the practice. As for the ways of the introduction, English professors would like to ask the Filipino instructors to have practice sessions alone, while non-English professors would like to have Japanese faculty members and Filipino instructors teach together. Two of the respondents'

坂本 美枝, 半田 純子, 宍戸 真, 阪井 和男, 新田目 夏実, “フィリピン人外部講師によるオンライン・マンツーマン指導に関する期待と課題,” 言語学習と教育言語学 2016 年度版, pp. 17-24,

日本英語教育学会・日本教育言語学会合同編集委員会編, 早稲田大学情報教育研究所発行, 2017 年 3 月 31 日.

Copyright © 2016-2017 by Yoshie Sakamoto, Junko Handa, Makoto Shishido, Kazuo Sakai and Natsumi Aratame.

All Rights Reserved.

greatest concerns were how to coordinate with Filipino instructors and how to design the courses.

Key words: English communication abilities, online one-to-one lessons, introduction into courses with credits

1. はじめに

大学の国際化が、まさしく国際的なレベルで大きな問題となっている現在、日本の大学は、他のアジア諸国に比して「授業と課程の英語化」などの点で遅れをとっているため、国際的通用性／共有性をうまく向上できていないとの分析がある[1]。このような現状を反映して、日本の大学教育現場では、さかんにグローバル人材育成の重要性が強調され、それを意識したカリキュラムの導入がなされてきた。グローバル人材について文部科学省は、「日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」と定義している[2]。グローバル人材育成のため、英語教育改革の必要性もより一層叫ばれるようになり、文科省は平成 25 年、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表し、小学校から高校までの英語教育に関してより具体的な目標を示した[3]。しかしながら、文部科学省による平成 27 年の英語教育実施調査では、公立中学校 3 年生で英検 3 級以上の英語力を持つものは 37%[4]、高校 3 年生で英検準 2 級以上は 34%に留まっている[5]。

このような現状の要因としてはさまざまなことが考えられ、多角的に調査する必要があるが、英語の授業が行われる環境にも起因しているのではないかと思われる。例えば英語授業のクラスサイズである。日本における英語科目の授業は、一般的に 1 クラス 30 名から 40 名の学生で実施されている。このような言語教育における大きなクラスサイズに対しては、個々の学生へのフィードバックの不足など第二言語学習の観点からの問題や、授業運営面での難しさ、支援が必要な学生への配慮の限界などが指摘されている[6]。このようなクラスサイズでのオーラルコミュニケーション授業の場合、ペアワークなどの手法を利用し、学生同士が会話練習を行うようなタスクが組み込まれるのが一般的であり、教員と学生が英語

で会話をするために十分な時間が確保できないと推測される。

実際に、日本人英語学習者は、英語の会話練習において、大学生になるまでにどれほど教員から個別の指導を受けてきた経験を持つのだろうか。2015 年、関東圏にある 5 大学の計 806 名の大学生を対象に、学校での授業において、教員と英語の会話練習に取り組んだ経験を調査したデータによると、回答者の 67%が、日本人あるいは日本人以外の教員とマンツーマンで英語を話す練習をしたことがない／あまりないと回答していた[7]。このことから、英語教育の現場では、個々の学生に応じた指導の不足が存在する可能性が高いといえる。

このことから、授業において補助的な教員を配し、マンツーマンでの会話の時間を設けることが、個々の学生のスキルや理解度に応じた指導を行うためのひとつの解決策と考えられる。

もちろん、英語母語話者を学生の人数分配置し、マンツーマンで会話の練習ができれば、それがもっとも望ましいスタイルであるかもしれないが、コストの面からも容易に実施できるものではない。そこで、比較的的人件費が安価で、日本との時差があまりない東南アジア在住の準英語母語話者を補助教員として、オンラインで指導を任せる案を検討する必要性が出てくるものと考えられる。

ここで、ひとつの有力な選択肢として、フィリピン人外部講師が挙げられる。フィリピンは日本との時差が 1 時間と短く、フィリピンの人々は小学校から英語で教育を受けている準英語母語話者である。Ozaki がまとめたフィリピン人英語講師の長所として注目すべきは、プライベートレッスンの安さだけではなく、彼ら／彼女らが、英語母語話者と非英語母語話者の両方の長所を持っているという点である。フィリピン人英語講師は、高い英語力を備えている一方、自身も英語学習者であった経験から、より効果的に学生を指導できるという。また、完全な英語母語話者ではないフィリピン人講師とのコミュニケーションにより、英語を国際語として使用する経験がで

きる点も望ましいとされている[8]。

このような背景からも、フィリピン人講師とのオンライン・マンツーマンレッスンを日本の大学英语教育へ取り入れる可能性を検証することには、大きな意義があるものと考えられる。

2. 先行研究

近年、フィリピン人講師によるオンラインレッスンの研究が報告されるようになってきた。以下に研究の概要と結果の一部のみを紹介する。

A 女子短期大学では、2013 年度前期にフィリピン人講師とのスカイプによる英会話活動を正規英語科目 3 科目に導入した実践例を紹介している。レッスンは、フィリピン人講師と 25 分間のマンツーマン英会話活動を授業に取り入れた形式で実施した。授業内だけでなく、自宅からも受講できるというもので、このような授業は、高い満足度を得られたとともに、第二言語コミュニケーションの自信が高まったという。このプロジェクトでは、前期期間(3ヶ月半)の授業に加え、自宅でのオンライン・マンツーマン指導を受けるのに、学生 1 名あたり 1 万 5 千弱(学生負担は 1 万円)で実施できたと報告している[9]。

B 音楽大学では、正規科目ではないが、カリキュラム外の活動としてフィリピン人講師のオンライン・マンツーマン英会話講座の実践報告がなされている。報告によれば、このレッスンは、2ヶ月間の短期であっても、CEFR の A1/A2 レベルの学生にとって、英語を話すことへの抵抗感を減らす効果を上げることができた。また、4ヶ月間受講した学生に関していえば、CEFR において 1 レベルの上昇が見られたことから、スピーキング力向上の可能性を示唆している[10]。

そして、C 大学の国際学部では、1 回 50 分の英語発話/会話レッスンを 9 週間(最大 36 回)、フィリピン人講師のマンツーマン指導により行い、学習者の心理的な側面を検証した結果を報告している。この研究では、レベルが高いフロー体験(「行為に完全に集中・没頭し、わくわくするような気持ちで満たされ、その時間が終わらないで欲しいと願うような心理的状态」)があったと確認されたことから、学生た

ちは楽しみながら、集中してレッスンを受けたことが示唆された。また、学生のモチベーションと関連する、有能感や自律性、自己効力感についても肯定的な結果を示した[11]。

このように先行研究の結果から、学習者の情意面だけでなく、効果の面でも、肯定的な結果が報告されている。そのため、フィリピン人講師によるオンライン・マンツーマン指導という形式は、英語科目への導入を検討する価値のある活動であるといえるだろう。

しかしながら、単位が付随しない自由科目より一歩踏み込んで、単位を与える正規科目として、あるいは正規科目内の活動として組み込むには、慎重に進める必要があるだろう。特に、コミュニケーション能力を伸ばすことを目指した改訂を英語科目に加えることを想定した場合、それにはどのような留意点があるのかを見つけ出すことは、改訂の第一歩になると思われる。このためには、改訂によって影響を受ける「現場」の教員への調査がもっとも適切であろう。教育現場へ成功裡に改革をもたらすためには、事前に相談し、改革に必要な前提条件をクリアしておくことが重要である[12]。

3. 調査目的

外部講師の指導を大学の正規英語科目内に導入することについて、日本の大学で教鞭を執っている教員はどのように考えているか、また、もし懸念があるとすれば、それはどのようなものを調査した。リサーチの時点で、回答者として想定していたのは、現職の日本人大学専任教員、あるいは非常勤教員であった。

外部講師が参加する英語プログラムの在り方について、回答者に明確なイメージを提供するため、本研究グループがこれまでの研究において取り上げ、比較的導入が容易であると判断した、いわば「現実的な」プログラムを想定し、あらかじめ提示した[13]。つまり、「フィリピン人外部講師によるオンライン・マンツーマン指導」を取り入れたプログラムであることをまず説明し、そのプログラムについて意見を求めた。また、導入の詳細な方法についても複数考えられるため、日本人教員と外部講師の役割分担が異なる 3

タイプを想定し、それぞれについて意見を聞くこととした。

4. 調査方法

想定した回答者が日本人教員であったため、質問／回答すべてを日本語で作成し、オンライン・アンケートフォームから回答を求めた。複数の学会や研究会のメーリングリストを通じて回答者を募り、2015年9月から10月にかけて実施した。

質問は4カテゴリから構成された。最初のカテゴリ（質問1,2）は回答者の属性情報についてである。「英語科目を担当しているか」「英語カリキュラムの作成に関わっているか」を尋ねた。第2カテゴリ（質問3,4）はフィリピン人外部講師の指導を正規英語科目へ導入することへの賛否についてである。この質問の直前に、前節で触れたように、「質問者が想定しているプログラム」について具体的な説明を加えた。このように、具体的な説明に続けて「上記のようなオンライン英会話プログラムを導入したいと思いますか」と質問しているため、「一般的に大学英語教育へ導入すること」ではなく、「回答者の属する教育機関へ導入すること」についての意見が表明されていると考えるのが自然な解釈であろうと思われる。第3カテゴリ（質問5-7）は導入の形態についてである。日本人教員と外部講師との役割分担について3タイプを想定し、それぞれについて導入意欲を尋ねた。最後のカテゴリ（質問8-12）は導入に伴う懸念についてである。さまざまな側面から懸念を引き起こすかどうか尋ねた。なお、質問4,12は自由記述として、質問3以降のその他の項目はすべて4件法（4.そう思う／3.どちらかといえばそう思う／2.どちらかといえばそう思わない／1.そう思わない）にて回答を求めた。

5. 結果分析

カテゴリ1への回答より、回答者総数は18名、うち9名が英語科目を担当し（うち7名が英語カリキュラム作成に関与）、9名は英語以外の科目を担当している（うち1名が英語カリキュラム作成に関与）ことがわかった。

カテゴリ1の属性情報に関する質問／回答を除き、質問項目とそれぞれへの回答の平均値を表1として付す。前節で述べたように、4件法を点数化し平均値を算出した。

カテゴリ2の、外部講師の指導を大学の正規英語科目へ導入することについては、英語担当／非英語担当とも高い意欲が見受けられた（英語担当：3.00、非英語担当：3.33）。導入意欲の背景にはさまざまな要因が考えられるが、質問3で肯定的な回答を寄せた回答者から挙げられた理由は、質問4の自由記述欄によれば以下である（質問3に対する肯定的回答者は14名で、自由記述欄にコメントが記入してあったのは13名、空欄1名であった）。1) 英語を実際に使う機会は歓迎すべきである（5名。一般的に日本人大学生には英語実践の機会が不足しているため、等）。2) 効果があるので導入に賛成である（4名。自分でもフィリピン人講師によるオンライン英会話指導を受けた経験があるので、効果を実感している、等）。3) 条件付きで賛成である（4名。内容、運用方法、日本人教員と外部講師との協働体制など、設定や調整を充分に行ったうえで導入することには賛成だが、それが叶わないなら反対、等）。質問3に対して否定的な回答を寄せた回答者（4名）から挙げられた理由は、「能力向上に資するとは思いますが、日本人教員の待遇悪化につながる」「話すべき内容を備えたうえでスピーキングの訓練をするべきである」「フィリピン人講師から指導を受けることに反対。アジア人の学生同士ならオンライン英会話プログラムに賛成」「すでにこの種のプログラムを実施している」であった。

さらに、カテゴリ3の導入方法については、前述のとおり、こちらから3つのタイプを提示して、導入意欲を尋ねた。タイプ1は「演習のみ委託」型といえる。日本人教員が授業設計／授業運営／評価判定を担当し、演習部分のみ外部講師が担当する形式である。タイプ2は「協働指導」型である。日本人教員が授業設計と評価判定を担当し、外部講師とともに授業運営を行う。タイプ3は「指導委託」型となる。日本人教員は授業設計と評価判定のみ担当し、授業運営と評価判定のための学習成果データ作成支援を外部講師に任せる形式である。全体平均としては、協働

指導型(3.14)と演習のみ委託型(3.13)の数値が高く、差が目立たないが、英語担当と非英語担当に分けて見てみると、違いが明らかとなる。英語担当の日本人教員は、演習のみ委託型(3.50)／協働指導型(2.86)のように回答しているが、非英語担当の日本人教員の回答は、演習のみ委託型(2.71)／協働指導型(3.43)と逆転する。

また、この3タイプについては、選んだ回答は異なっても、多くの回答者それぞれにとってベストチョイスがひとつあるという結果になった(ひとつだけ他よりも高得点となった回答者13名／すべて同じ得点2名／空欄3名)。上記の平均値と同様、ここでも、英語担当日本人教員には演習のみ委託型が、非英語担当日本人教員には協働指導型が、「もっとも適切な導入方法」と認識されている事実が表れている。この差は、英語科目の運用に関するそれぞれのイメージの差といえるかもしれない。例えば、英語科目担当教員の筆者にとっては、演習のみ委託型のほうがはるかに実施プランを考えやすい。

最後に、カテゴリ4の懸念点については、質問8の「外部講師のコーディネートに労力がかかる」(管理不安)に対する値が飛びぬけて高くなった(全体3.12／英語担当3.33／非英語担当2.88)。他には3を超える項目は見当たらず、非英語担当教員の質問12「外部講師が関わる授業の設計がうまくできるか心配である」(設計不安)に対する回答が次に高い2.75となった(全体2.35／英語担当2.00)。

さらに、質問14の自由記述欄には具体的な懸念点が寄せられたが、それらは以下のようにまとめることができた。1) 外部講師に関する懸念。これは、フィリピン人講師あるいは外国人講師の指導への懸念と解釈することもできる。フィリピン国に対するマイナスイメージや、アジアの英語に対する偏見から、学生がフィリピン人講師を指導者として受け入れないのではないかと懸念、講師の指導力／対応力に差があるのではないかと指摘等がなされた。2) 外部講師に委託することへの懸念。この点はさらに以下のように分類できる。2-1) 日本人教員と外部講師との役割分担に関する懸念。両者が協働体制を構築できるのか、日本人教員の役割が減少してしまう

のではないかと、などのコメントが見られた。2-2) 授業設計に関する懸念。スピーキングのみに注目するのではなく、他技能との関連づけが重要だとの意見や、「英語コミュニケーション能力」として何を習得させるのか、評価基準を適切に定めておく必要があるなどの見解が述べられた。3) オンライン指導であることへの懸念。授業運営はうまくいくのか、つまり、インターネット接続等、オンライン指導に適する環境の整備や、接続の不具合等でオンライン指導が成立しなかった場合の補講をどうするかなど、さまざまなレベルでのサポート体制確立を求める意見があった。4) 大学全体への働きかけに関する懸念。このようなプログラムが大学全体の理解を得て、組織的な取り組みになることができるかどうか、不安を述べるコメントがあった。

上記1-5の懸念についてはいずれも、さらなる調査／考察が必要である。ただし、一部については対処できるように思われる。懸念1に含まれる、フィリピン人外部講師に対する学生の偏見についてであるが、確かに、ネイティブスピーカの英語に対して、日本人大学生が抱く「ステータス(社会における地位に関する認識)」意識は、他の英語に比して高いといえる[14]。しかしながら、本研究チームが過去に行った研究では、フィリピン人講師に対する日本人大学生の満足度は非常に高かった[15]。よって、日本人大学生にとって、英語指導者の国籍は特段の関心事ではないように思われる。

6. まとめ

アンケート調査の結果をまとめると、まず、外部講師のオンライン会話／発話指導を正規英語科目に導入することについて、日本人大学教員の意欲は英語担当／非担当ともに高いといえる。その理由として、日本人大学生にとって必要であり現状充分であるとはいえない英語の実践的使用という機会を提供するものである、また、そのような指導は効果的であるという指摘が上がった。ただし、この導入は、「指導内容、運用方法、日本人教員と外部講師との協働体制」等の調整が適切に行われる、つまり、「カリキュラム内に適切に位置づけられる」という条件があって初

めて日本人教員の賛同を得ることができる。る。

このポイントについては懸念点とともに再度振り返

表 1 教員アンケート結果 (カテゴリー2-4)

フィリピン在住の準ネイティブ外部講師と協働して、英語コミュニケーション能力を伸ばすことを目的とする科目を大学英語教育に導入することについて、あなたのご意見をお聞かせください。この科目の導入により、日本人教員がひとクラスで担当する学生数が抑えられ、少人数クラス実現が可能になることが期待されます。フィリピン人講師の指導方法としては、Skype(無料のオンライン通話サービス)を使用したオンライン英会話/発話練習を想定しています。	全教員	英語科目を担当している教員	英語科目以外を担当している教員
Q3. 上記のようなオンライン英会話プログラムを導入したいと思いますか	3.17	3	3.33
Q4. 上記回答の理由を述べてください。	*	*	*
質問3において、「どちらかといえばそう思う」「そう思う」と回答された方に伺います。以下のようなやり方での導入についてどう思いますか? (Q5~7)			
Q5. 日本人教員が授業設計(レッスンプラン作成)、授業運営(指導)および評価判定を担当し、演習部分(会話/発話練習)のみ外部講師が担当する形式で導入する。(→演習のみ委託)	3.13	3.5	2.71
Q6. 日本人教員が授業設計(レッスンプラン作成)と評価判定を担当し、外部講師とともに授業運営(指導)を行な形式で導入する。(→協働指導)	3.14	2.86	3.43
Q7. 日本人教員が授業設計(レッスンプラン作成)と評価判定のみ担当し、授業運営(指導)と評価判定のための学習成果データ作成支援を外部講師に任せる形式で導入する。(→指導委託)	2.43	2.57	2.29
Q8. 外部講師のコーディネイトに労力がかかる。	3.12	3.33	2.88
Q9. 外部講師の日本人学生への指導力(日本人の学生がわかるように説明できるか)が心配である。	2.18	2.22	2.13
Q10. 外部講師の英語力が心配である。	1.71	1.78	1.63
Q11. 文化の違いが心配である。	1.47	1.78	1.13
Q12. 外部講師が関わる授業の設計がうまくできるか心配である。	2.35	2	2.75
Q13. 時差(1時間)によるサポートのトラブルなどが心配である。	1.65	2	1.25
Q14. その他の懸念点などがありましたら、ご記入下さい。(任意)	*	*	*

外部講師の指導を導入する方法については、英語担当教員と非英語担当教員では異なる結果となった。英語担当教員が、日本人教員が授業設計から授業運営、評価判定までほとんどの部分でイニシアチブを取り、外部講師には演習部分のみ任せる「演習のみ委託」型を好むのに対し、非英語担当教員には日本人教員と外部講師が協働して授業運営を行う「協働指導」型が好ましく映っている。

外部講師によるオンライン指導導入に伴う懸念点については、多岐にわたっており、さらなる調査/分析が必要であることはいまでもない。ただ、重大な懸念に対処するヒントは示されているように思う。外部講師との協働体制構築への不安(管理不安)や授業設計に対する不安(設計不安)が高い

数値を集めたということは、無目的/無計画に外部講師と会話を行っても効果は望めない、他の英語科目や英語以外の科目ともカリキュラム内でうまく調和するやり方を取らなければならない、という見解を、日本人教員が広く共有していることを示すのではないかとと思われる。よって、カリキュラム全体という広い視野から、履行が可能な授業内容や授業運営などに関する協働ルール/ガイドラインを設置し、それに沿って科目運営を行っていくことが重要である。

このアンケート調査は、学会/研究会のメーリングリストを通じて実施したオンライン調査である。よって、そもそも英語教育に強い関心を持ち、ICTに抵抗のない教員に向けられたものであるという

ことができ、その意味で結果が偏っている可能性もある。さらに、18名という限られた日本人教員の意見を基に分析を行っているため、広く一般に敷衍できる結果とはならないかもしれない。しかし、英語教育に強い関心を持ち、ICT活用に長けている日本人教員は、実際にオンライン英会話プログラムが導入された場合には実務を担当する可能性が高い。本調査はそのような役割を担う教員からの意見であり、重要な知見を含んでいると考えている。また、より広い視野に立てば、外部講師によるオンライン・マンツーマン指導の大学英語科目への導入という、現在進行しつつある変化について、さまざまな側面からの懸念を掬い上げることができたという点で、重要な示唆を与えているのではないかと考える。

7. 今後の課題

一定の有用性は認められる今回の調査であるが、調査の範囲や方法にいくつかの改善点が見られることを申し添えたい。

まず、質問紙をすべて日本語で作成し、調査対象を日本人教員に絞った点である。フィリピン人外部講師によるオンライン指導を取り入れることは、とくに日本人教員の役割に大きな影響を与えることからこのような調査方法を取ったが、ファカルティメンバーである外国人教員の意見も併せて聞くべきであった。そうすれば、外部講師との協働体制について異なった懸念や注意点が明らかになったかもしれない。

また、回答者に明確なイメージを持ってもらうためこちらから現実的かつ具体的なプログラム案／導入案を想定したが、そのために、切り捨ててしまったり大雑把にまとめてしまったりした指導方法等が見られたという点である。例えば、コスト等の観点からすればより現実的と思われるグループ指導を導入することについての意見はどうか、「演習のみ委託」と「協働」との境界はそんなにはっきりしたものではなく、さまざまな中間形態があるのではないか、などの疑問点が立ち現れる。

これらは、今後同種の調査を行う際のみならず、

実際に外部講師の指導によるオンラインプログラム導入を検討する際にも十分に留意したい点である。

謝辞

本研究は「日本人英語学習者へのオンライン会話活動導入に向けたガイドライン策定」(学術研究助成基金助成金／基盤研究(C):課題番号 15K02735)の一環として行った。

参考文献

- [1] 太田浩 (2011) 大学国際化の動向及び日本の現状と課題：東アジアとの比較から。『メディア教育研究』8巻1号. S1-S12.
- [2] 文部科学省 (2011) 産学官によるグローバル人材の育成のための戦略。
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf (2017年3月10日アクセス)
- [3] 文部科学省初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室 (2013) グローバル化に対応した英語教育改革実施計画。
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf (2017年3月24日アクセス)
- [4] 文部科学省 (2015 a) 平成 26 年度英語教育実施状況調査 (中学校) の結果概要。
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/06/04/1358566_02_1.pdf (2017年3月24日アクセス)
- [5] 文部科学省 (2015 b) 平成 26 年度英語教育実施状況調査 (高等学校) の結果概要。
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/06/10/1358566_03.pdf (2017年3月24日アクセス)
- [6] 甲田直喜, 遠藤祥雄 (2006) 英語学習における意欲の向上. *dialogos*. 111-129.
https://toyo.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=5128&item_no=1&page_id=13&block_id=17 (2017年3月24日アクセス)
- [7] 半田純子, 坂本美枝 (2016) 英語コミュニケーション能力向上のための活動：期待と実態. 外国語教育メディア学会 (LET) 第 56 回全国研究大会.
- [8] Ozaki, Shigeru (2011) Learning English as an International Lingua Franca in a Semi-English-Speaking Country: The Philippines. *Asian EFL Journal Professional Teaching Articles Volume 53 July 2011*. 51-60. <http://asian-efl-journal.com/PTA/Volume-53-so.pdf> (2017年3月24日アクセス)
- [9] 三田 薫(2014)スカイプ®英会話を活用した短期大学英語授業の試み—フィリピン人講師との1対1のオンライン英会話レッスンを 授業に組み込むことによる効果—. 『実践女子短期大学紀要』35巻. 19-43.

- https://jissen.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1253&item_no=1&page_id=13&block_id=30 (2017年3月24日アクセス)
- [10] 大和田和治 (2016) 東京音楽大学におけるオンライン英会話プログラムの導入とその教育的効果の検証. 『東京音楽大学研究紀要』 39 巻, 53-66. https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1037&item_no=1&page_id=43&block_id=79 (2017年3月23日アクセス)
- [11] 新田目夏実 (2016) フィリピン人講師によるオンライン英語教育の可能性について—動機づけ研究との関連で— 『拓殖大学 語学研究』 135 巻, 29-64. http://journal.takushoku-u.ac.jp/lcri/lcri_135.pdf (2017年3月23日アクセス)
- [12] OECD (2016) *Innovating Education and Educating for Innovation: The Power of Digital Technologies and Skills*. OECD Publishing. <http://dx.doi.org/10.1787/9789264265097-en> (2017年3月4日アクセス)
- [13] 坂本美枝, 半田純子, 宍戸真, 阪井和男 (2014) 準ネイティブスピーカーによるオンライン発話指導の実践報告. 『e-Learning 教育研究』 第9巻, 21-28. 坂本美枝, 半田純子, 宍戸真, 阪井和男, 新田目夏実 (2016) 発話練習における学習者の内省分析. 『言語学習と教育言語学: 2015 年度版』, 1-12. <http://www.decode.waseda.ac.jp/jeles/archive/jeles45-2015/jeles45-2015.pdf> (2017年3月24日アクセス)
- [14] Takahashi, Mariko (2012) *Language Attitudes of Japanese University Students toward Japanese English*. 日本英語教育学会第41回年次研究集会論文集, 27-34.
- [15] 坂本美枝, 半田純子, 宍戸真, 阪井和男 (2014) カランメソッドを用いた英語発話練習: オンライン・マンツーマン指導. 第30回日本教育工学会全国大会講演論文集 (一般研究), 831-832.